縄文の神秘

梅原猛

学研M文庫

縄文の神秘

梅原 猛

常州大学図書館
藏書

学研M文庫

縄文の神秘

梅原　猛

学研M文庫

2013年7月23日　初版発行

●

発行人———脇谷典利

発行所———株式会社　学研パブリッシング

〒141-8412　東京都品川区西五反田2-11-8

発売元———株式会社　学研マーケティング

〒141-8415　東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本 —中央精版印刷株式会社

© Takeshi Umehara 2013 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは——編集部直通　Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——
販売部直通　Tel 03-6431-1201

・文書は、〒141-8418　東京都品川区西五反田2-11-8
学研お客様センター『縄文の神秘』係

★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。
Tel 03-6431-1002（学研お客様センター）

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複製権センター　TEL 03-3401-2382

http://www.jrrc.or.jp　E-mail：jrrc_info@jrrc.or.jp

Ⓡ〈日本複製権センター委託出版物〉

う -1-3

目次

プロローグ
縄文芸術の見直し　6
第一章　森の文明　26
——日本文化の基底にあるもの
第二章　生けるものの永劫回帰　52
——大地と天界を貫く意志
第三章　縄文土器礼賛　84
——アニミズムと性の表現
第四章　土偶の神秘　168
——死の尊厳と再生への願望

写真解説　渡辺　誠（名古屋大学名誉教授）
写真　学研写真部（クレジット記載のもの以外）

縄文の神秘

梅原 猛

学研M文庫

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

目次

プロローグ
縄文芸術の見直し　6
第一章　森の文明　26
——日本文化の基底にあるもの
第二章　生けるものの永劫回帰　52
——大地と天界を貫く意志
第三章　縄文土器礼賛　84
——アニミズムと性の表現
第四章　土偶の神秘　168
——死の尊厳と再生への願望

写真解説　渡辺　誠（名古屋大学名誉教授）
写真　学研写真部（クレジット記載のもの以外）

本書は、『人間の美術』第一巻「縄文の神秘」（1989年、学研刊）より、著者の執筆分を抜粋して文庫化したものです。

プロローグ
縄文芸術の見直し

燃えさかる炎をあらわす土器
高さ 46.5cm　新潟県十日町市・笹山遺跡出土　縄文中期　十日町市博物館所蔵（国宝）

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

岡本太郎の「発見」

一九四一年、パリに留学し、前衛芸術運動の展開をつぶさに見て帰った岡本太郎は、「リボン」などの名作を発表して、前衛新人画家としての名声をほしいままにした。このような岡本太郎にとって終戦は当然歓迎すべきものであったが、彼は日本のいずこをみても芸術らしいものに出会うことはないという強い実感をもった。当時画壇において神様のような存在であった梅原龍三郎の描く富士山の絵も、彼にとってはいたずらに八の字ひげをはやして威張っている田舎紳士の泥くさい絵にすぎなかった。これこそ日本のすばらしい伝統よともてはやされる飛鳥・奈良時代の仏像も、彼からみれば同時代の中国の仏像のこざかしい模倣にすぎなかったのである。

この岡本太郎が日本においてただ一つのすぐれた芸術と賞賛したのが縄文土器であった。なかでも岡本太郎が口をきわめてほめたたえたのは中期縄文土器、とくに「火焔土器」と称せられるものであった。縄文土器のなかでも、中期縄文土器、なかんずく火焔土器はまさに前衛芸術の名に値するものであった。そ

れは一切のけちくさい実用性、あるいはもっともらしい具象性を無視したような奔放（ほんぽう）きわまる抽象の芸術であった。それはまさにエネルギーにみちて、そのダイナミックに流れ、うごめく線は土器という形象を超えて天に達せんばかりであった。岡本太郎が後年愛用した言葉に従えば、まさにそれは「爆発する」芸術であった。

「遺物」から「芸術品」へ

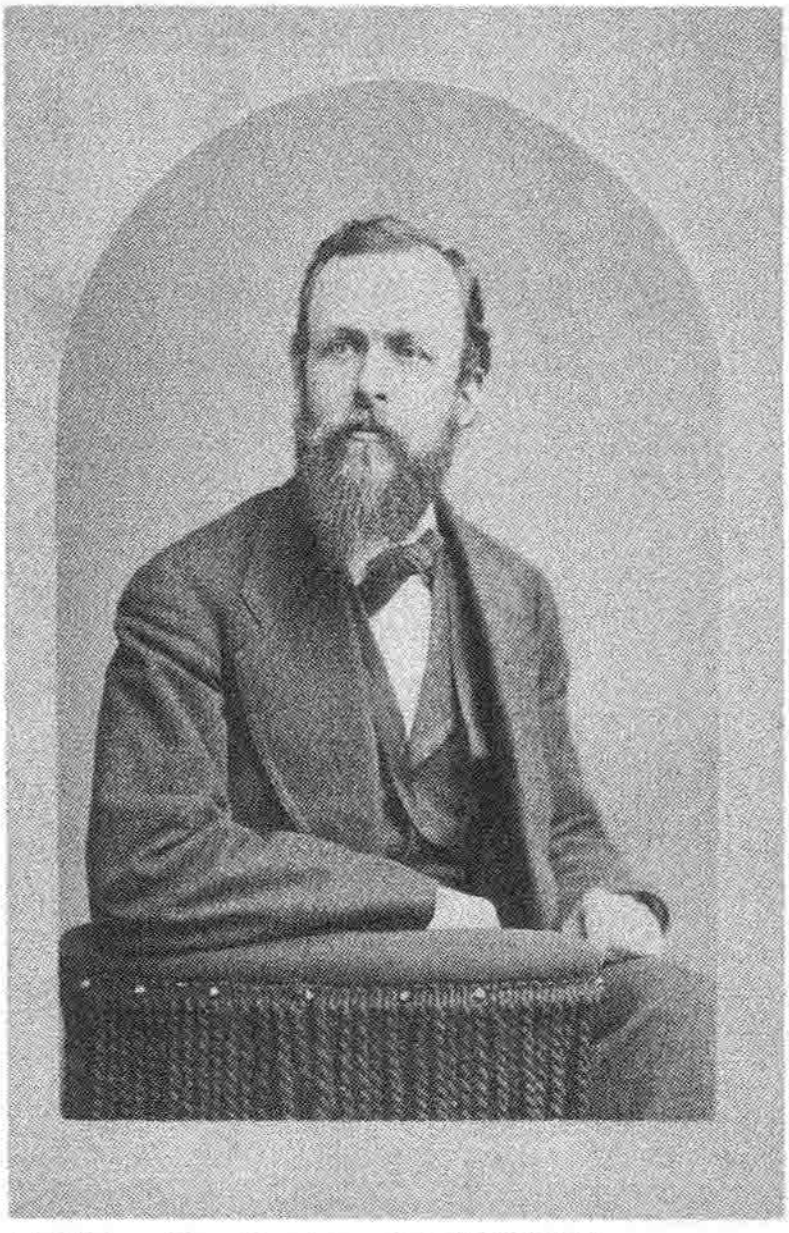
岡本太郎には表現の魔術師のようなところがある。彼が身ぶり手ぶりで縄文土器はすばらしいと語ると、あたかもそこにあった土器が神聖な芸術の光を発するようであった。まさにこのようにして、縄文土器は芸術になったといってよい。

もちろんそれ以前にも縄文土器の美に魅せられた人が数多くあった。縄文土器が多く出土するところへ行くと、よく縄文土器に魅せられて、商売をほったらかしにして、あちらこちらを発掘して歩いた町の考古学者の話を聞く。土器を発掘したのだから、考古学者と名のるよりしかたがないが、実は彼らはやは

り芸術家であり、あの縄文土器の美しさに魅せられて、自分の商売をほったらかしにして、当時まだそれほどきびしく禁止されていなかった文化財の発掘、あるいは盗掘を続けたのであろう。しかし彼らがどんなに縄文土器の美に魅せられたとしても、それでそのまま縄文土器が芸術品になるわけではなかった。芸術品になるには、やはり玄人（くろうと）の鑑定が必要なのである。芸術の本場パリに長年留学し、輝かしき前衛芸術の旗手であった岡本太郎にまさる鑑定家はない。岡本太郎のあの熱狂的な賞賛によって縄文土器は芸術の高みにあがったわけである。

縄文研究のあけぼの

最初に縄文土器が注目されたのは一八七七年（明治一〇年）のことである。動物学の学者として東京大学に招かれていたエドワード・S・モースは、東京の大森を通りすぎたときに一つの貝塚を見つけた。そこを試しに掘ってみると貝殻（かいがら）とともに多くの土器が出土した。すでにアメリカのフロリダなどで貝塚を掘ったことのあるモースは、これをまちがいなく貝塚であると考えて大森貝塚



エドワード・S・モースの肖像写真
40歳前後のモース　写真＝東京大学総合研究博物館提供

と名づけた。モースはしかしフロリダなどとちがって、この貝塚で出土する土器の質と量が豊富なのにびっくりした。それは最初アイヌ式土器ともよばれていたのである。その文様がアイヌの文様によく似ていたので、先住民であるアイヌ民族がつくった土器ではないかと考えられたからである。やがて縄文土器という名称が定着し、東京の弥生町から出土した弥生土器と並んで、日本の先史時代の二種類の土器と考えられるようになったのである。そして考古学が発展すると弥生土器は稲作農業時代の土器であり、縄文土器はそれ以前の狩猟採集時代の土器であることが分かった。

常識への懐疑

縄文土器の研究史において画期的なできごとが二つあったと思う。一つは山内清男を中心とする土器の相対的年代決定である。一つの土地を掘りさげるとその地層によってさまざまな土器が出土するが、下から出る土器は上から出る土器より古いと考えねばならない。多くの発掘場所におけるこのような注意深い比較研究によって、土器の相対的年代が決定される。このような学問の積み

重ねとして、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期という縄文土器の分類が可能になったのである。

しかしそれはあくまで相対的な年代の決定である。一つの土器が何年前につくられたかという絶対年代については、そのような方法ではまったく何もいうことができない。この絶対年代に一つの手がかりを与えたのが、戦後行われたカーボン鑑定である。この、戦後新しく開発されたカーボン鑑定という方法によって縄文土器を鑑定したところ、驚くべき数値が出た。たとえば長崎県の福井洞窟（どうくつ）で発掘された土器は、実にマイナス一万二〇〇〇年を数えた。つまり紀元前一万年にできた土器ということになる。文明の発祥地と考えられるメソポタミアで発掘されたもっとも古い土器はマイナス八〇〇〇年である。それまで土器は、農耕とともに発明されたのではないかという漠然たる常識が存在していた。もしカーボン鑑定の結果を信ずるなら、日本の土器は世界最古の土器であり、狩猟採集という原始的な生産の方法のもとに生活していた原始日本人は世界にさきがけて土器製造の技術を知っていたことになる。

皮肉なことには、このカーボン鑑定の結果にもっとも反対したのが、土器の

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com